

広島俳句倶楽部

令和七年六月作品集

夏休み

森口良樹

私は六人兄弟の末っ子に生まれました。母は当時、子育てと父が常時雇っていた四、五人の住み込みの職人の世話に追われる日々でした。夏休みや冬休みなど、休みが続くたびに、私はよく叔母の家に行かれました。叔母の家には、私と一つ違いと三つ違いの後兄弟がいたので、家に居るより、毎日が楽しかったのを覚えています。叔母の家の前には、山や川、田圃や畑、近くに分校や瀬ノ瀬ダムがありました。それは、当時の私にとって、新鮮でとても安らぐ時間と空間でした。夏には、山へカブトやクワガタを捕りに、すぐ前の川では一日中、水遊びに興じ、鰻や鮠を追い、夜には螢を捕まえに行きました。背戸の用水路で冷えた瓜や西瓜は、貴重なおやつでした。あの頃出会ったそれぞれのものが、俳句の季語であったことを知り、今は不思議な縁を感じながら、句作に取り組んでいます。

ダムの灯に朝早く捕る兜虫

大櫟蹴つて落とせり鋏形虫

弟に被せて歩く捕虫網

じやんけんの順に淵へとダイビング

穴釣りに握る竹藪の大蚯蚓

背戸山の女竹で作る水鉄砲

小流れに両足浸けて西瓜喰ぶ

明日登る前山を見て夕端居

お社へ道一本の青田かな

台風過川へ行くなど叔母の声

《作品鑑賞》

雲雀

子どもの頃、長い休みに豊かな自然の中にどっぷりと浸かって過ごされた様子が読み取れます。それにしてもきつと50年以上も昔のことでしょうに、細かに描写されているのは、それほどにその時間が新鮮で楽しい経験だったのでしょうか。読んでいると私もそこに仲間入りしているかのように感じられます。

大櫟蹴つて落とせり鋏形虫

大きな櫟の木なので子どもが揺すった位ではびくともせず、男の子たちは勢いをつけ蹴ったのでしょうか。大自然の中での巧みな技ですね。

弟に被せて歩く捕虫網

心をすっかり許しあった間柄なので、網を被せられた弟も面白がっているのでしょうか。漫画の中の一コマのようです。

背戸山の女竹で作る水鉄砲

今では見ることも稀な竹製の水鉄砲。柔らかく細工のし易い女竹で作るのは作りなれた子や大人からの伝授でしょう。か。びしよびしよになって水を掛けあうのはどんなにか楽しかった事でしょう。

明日登る前山を見て夕端居

一日中遊び疲れた後の夕涼み、明日はあの山に登るよ！と話されてまた大きな期待に包まれているひと時、わくわくしながら眺める前山ですね。

奥の宮下りてまぶしき青葉かな

入海のすみずみに寄せ卯月波

梅の実に門江の浜の風やまず

青嵐の刻を越えれば伯耆富士

景桜の雨の残れる墳丘墓

方墳へと円墳へと夏の霧

山あひに昇る煙や梅雨近し

花樗知らぬ地名の面白き

鶺鴒の我呼ぶ声と思ひけり

この道の懸巢は昨日見し懸巢

夏きざす枝の高きに鳥の声

四十雀けふは窓辺に声のして

若葉かな胸いつばいに香を吸うて

ペチュニアの零れ種からはや蕾

新しき薔薇園に吹く街の風

近寄ればすぐ親の来る鴉の子

瞬きの間に翡翠を見失ふ

帰る足ひととき止めて月見草

夏の雨しばらく音を聞いてをり

ひるがへる裾や葉裏や風青し

花菖蒲揺らしてゐたる谷の風

声かけられ小笹に貫ふ莢豌豆

突然の青大将に驚きぬ

川沿ひに上れば植田広がりぬ

通るたび見上ぐる枇杷の色づきぬ

錦川青鯉魚を食みるたり

川に降り水遊びする親子連れ

枕辺にメモ書き増ゆる熱帯夜

夏蝶のもつれ合ふなり坂の上

人いつばい車いつばい登山口

佐保光俊

高尾ひとみ

あざみ

黒焦のクルス見上ぐる五月かな

手で割つてカステラ匂ふ五月かな

橋渡る市電の音や初夏の雨

記念切手近所に買ひに夏めけり

大鉢に重なり合うてアマリリス

子を見送りひとつつ見るクレマチス

大学の緑蔭に立つ牧師像

合歡の花今日も歩ける裏通り

滑り台で笛吹く少女夏の夕

昼日中町の夏川匂ひけり

亜矢

香しく静かな時よ梅仕事

卯の花の我にこぼるる梅雨入かな

紫陽花を生けて茶の間の賑々し

汗みずく白衣の務め誇らしき

皮剥をけふの仕事のご褒美に

吾子はいま乙女となりぬ夏祭

色褪せし家族写真や夏館

この橋に竜馬立つたか青嵐

諫早の海の色なる焼酎よ

長崎に灯りあふるる星月夜

綾乃

坂を来て白詰草の原に出づ

藤浪や鳥たちなべて声のよき

浮雲を映せる川や夏は来ぬ

景桜や自転車を押す二人連れ

新緑の川辺に沿うて電車過ぐ

川音を遡りゆく五月かな

天辺もすでに青葉の日浦山

風音に遠き滝音混じりをり

そこここに滝の音聞く木立中

万緑へ歌のやうなる瀬音かな

井藤希

黙々と歩き続けて花通路

青鷺の飛び越えてゆく麦畑

裏庭の繡線菊に雨降りつづく

雨上り今年二度目の薔薇咲けり

いつも行く道に零れてえこの花

青蛙庭に来て鳴く夕べかな

短夜や電車の音を遠く聞き

闇のなか山から聞こえ杜鵑

杜鵑庭の仕事の手を休め

コーラスの仲間と見上ぐ夏の空

大畑恵

航跡の降立つ白き夏の瀬戸

遠浅を一線に寄せ青景潮

池の端の岩は苔むし著我の花

音させて山鳩歩く夏落葉

暮るる日に染まり水田の夏の鴨

川土手の映つてゐる植田かな

前山は露の中なり梅熟るる

草取りの手を止め雨意の空仰ぐ

夕雲の薄れてゆける麦畑

旅先に探すはしりのさくらんぼ

暁子

庭の蝶上下しながら飛び続く

近場なる園に見に行く竹の花

卯月の月見てゐる横に夫座る

我が植田受くる若者決まりたる

挿せる葉に飼ふ幼虫は黒揚羽

夏の風雀の声と部屋に入る

泰山木咲くと隣人知らせくれ

眠れぬ夜遠雷しばし鳴り止まず

重き戸を開けて土蔵に南風を入れ

南風に乗り聞こゆるチャイム五時限目

すみれ

鳥になり覗いて見たし朴の花

岩に座し水飲んでをり樟若葉

潮の香の混じる川辺や走り梅雨

梅雨の間の安芸の小富士に日の差して

夏の蝶トンネルに入り見失ふ

山桜桃の実一つ二つと抓みたり

さくらんぼ箱のどれから抓まうか

紫陽花のうすむらさきを好みけり

蓮の葉を揺らし雨粒零したり

青べらが入荷したよと店の人

知佳子

蛸蛸見つけ幼子みんな集まれり

母の畑目の前を雉走りたる

戸を開けたとたんに入る蒸かな

物干せば隣家から来る薔薇の香よ

幼子の手に集めたる桜の実

田植終へみんなて写真撮りにけり

枇杷の木に一つ残らず袋掛

緑蔭から子の綱引きを見てをりぬ

薰風に旗はためかせマスゲーム

水鉄砲花へ向けてと子に言へり

ちどり

夏来る列車で渡る大井川

見慣れたる車窓の景や街薄暑

山法師の花盛りなる坂下る

皇居まで真つ直ぐ見えて椽の花

走り梅雨田端日暮里鶯谷

夕焼の備前の国を通り過ぐ

ポケットの鍵確かむる栗の花

玄話の日傘の揺るる町の角

カフェタイム紅花椽の花を見て

オリーブの花咲く角を曲がれよと

辻純江

一面の蓮華草へと日の差して

山下りて草臥れし身に春の虹

新調の机に薔薇を飾りたる

彼方向き此方にも向きアマリリス

夕暮の風に散りたるクレマチス

大木の下に寛ぎ青嵐

緑雨降り雀の声の頻りなる

紫陽花の道に町費を集め行く

見上げたる芝棟の百合揺れてをり

紫蘇植えてすぐ降る雨を仰ぎけり

雲雀

夏の朝初めて青きアサイーボウル

明易しまたおはようを言うニュース

短夜や出発までにする事は

黴の香か室か古き博物館

諦めず眺めて動く蟹がおり

玉葱が百もあるらし小人図鑑

背筋立つ重き真紅のアマリリス

人知らで山奥に幸せな目高

国道の片側飲み込んで茂り

梅雨雷はプラネタリアムに落ちてない

ふじ女

風吹いて紙吹雪なる花水木

もう一度庭に出てみる緑雨かな

更衣亡き妹の服を着て

音もなく青梅落つる日暮れ時

走り来るショートパンツの十五才

大南風貨物列車は海へ向き

父母に会ひに墓苑へ白日傘

月涼し雁木に小舟あたる音

深き息滴る山の中に居て

万緑の珈琲館の仄暗し

松田裕子

山間の闇や数多の螢とぶ

その山に泉ありけり雲生まる

びよこびよこと大枝登る小雀かな

玄葵葬儀の列の通り過ぎ

自転車に蜘蛛の囀かかる朝かな

あさなさを柏景紫陽花伸びきたる

蹲に紫陽花の影映りたる

紫陽花を愛でて笑へる前歯かな

梅雨晴間濃きコーヒーを啜りたる

その遺骨身元を捜し沖縄忌

村上正人

父母逝きて訪はぬ故郷花菱

痴れてなほ過去鮮明や薔薇崩る

八橋に人を躲して菖蒲園

前撮りの二人取り巻く花菖蒲

旅先に替はる枕や明易し

板長は半農半漁飽食ふ

浚渫の土囊道路に梅雨に入る

月光に竿の一闪夜釣かな

火を止めて促す起床朝曇

採血に浮かぬ血管油照

森口良樹

讃岐富士遠くに見えて麦熟るる

見上ぐれば光の透ける朴若葉

田植済むと景書の文字の懐かしき

夏霧や吊り橋触るる手は湿り

星座図を眺むる夜や梅雨近し

地図の上それでも旅や梅雨の夜

紫陽花の雨に濡るるを窓越しに

忍冬を歩みを止めて眺めけり

螢の穂の風のなすままそのままだ

秋楡

立ち話なほも揚羽の回りたる

薔薇の香や自慢の色に指を添へ

擦り切れし辞書に旧姓花菖蒲

十薬や沱生まるる音を聴き

梅雨めくや買物前の走り書き

睡蓮の紅から白へ亀移る

黄鶯の鳴き声真似て登りたり

大山や下野草に荷を降ろし

多羅葉に刻める文字や夏の月

母の日に土産のラスク食べてをり

母の日も仕事の話聞いてをり

今年また咲いた芍薬摘みにけり

遠くから眺むるもよし鉄線は

夏山へおにぎり二つ買つて行く

おにぎりを食べて眺むる夏の山

南風写真撮つてと頼まれて

向日葵や女四人の笑ひ声

十五分デスクに伏して昼寝かな

薰風に段取り進む畑手入れ

白鷺の降り立つ植田水光る

祖母の家へ真つ直ぐ延びて夏木立

鐘を撞く坊守にまぜ吹きにけり

音もなくせせらぎ濡らし半夏雨

生え際の白髪掻き上げ汗を拭く

万緑に木椅子を置いて抹茶かな

万緑の山に源泉探しをり

手の届きさうなる枝に落とし文

今井淳子

土肥律子

山野ウタ

春の空飛行機雲の伸びて消え
砂遊びする子を見つ潮干狩
境内の蔭金蘭に目をひかれ
蛙鳴く木目にしつと見入る夜
母の日に吾の似顔絵を見つたり
茶室への道に群れ咲く著莪の花
花あやめ畑仕事の手を休め

金つ

垣根よりアー子も埋め紅き薔薇
ばらつばらと止むこともなく薔薇の散る
更衣おしやべり止まぬ女学生
右左上へ下へと螢の火
茂る葉に点滅ゆくりと螢かな
螢飛ぶせせらぎの音かすかなり

大原良子

金雀枝の茂れる道を暮へ行く
石楠花の山道分けて咲いてをり
義母の好みし笹百合を山に見て
山桃の見上ぐれば早や鈴生りに
蔓手毬岩場高きに咲きにけり
便りには蔭戸にしたと書かれあり

美耶

朝風にゆつくり揺るる蓮かな

母となり梔子の咲く夜を眠る

雷去りて赤子泣きだす夜半かな

汗の子を抱いて見せたる合歡の花

蟻の列行き先決むる蟻の居て

桑門わかこ

桑桜の風に隣も窓を開け

アマリリス夏の夕方の淋しくて

どくだみを吊るし一時ぼんやりと

呑み助の揃つてたのむ冷奴

ダリ展をはげしき夕立に帰りけり

高梨英子

眼帯を取つて眩しき五月晴

雨上り薔薇の香放つ角の家

雨の夜の道明りなり花卯木

ベル鳴らし僧の下り来る夏の朝

桜陽

機上より斜めに見ゆる五月富士

実梅はや黄色くなれる朝かな

夜の雨止んで梔子香りけり

万緑の中に小さき池のあり

撫子

紫陽花に夫が興味を持ち始め

それぞれが好きに少して額の花

梅雨空に泰山木の花白く

風鈴の青色いろいろ観音寺

山崎桂子

雨の後棚田を照らす梅雨の月

川土手は今日は川から南風吹く

草刈つて県道沿ひの匂うたる

上島康子

夜の窓守宮二匹が張り付いて

守宮かな獲物を狙ひ足動き

新馬鈴薯を雨の合間に試し掘り

紀英子

通り雨過ぎて梔子香りけり

束の間の晴間に鳴くや時鳥

郭公や葺き替への葦屋根に上げ

熊谷ゆり子

花石榴雨後の道路を染めてをり

夏の浜ポケット図鑑携へて

万緑や扉重たき无言館

高嶋絹代

山開き頭を垂れて祝詞聞く

風受けて黙々歩く登山道

赤茄子の三つ四つと色付きぬ

民

垣根越し紫陽花の咲く曲り角

一仕事終へて冷索麵する

夏衣友とラン子の風を受け

古川廣子

母の日に娘が髪を染めくれし

通勤の蝙蝠傘の並ぶ梅雨

桐の花齡重ねて母の歳

みさ子

梅雨空へ家を解く音響きをり

子の家へ夏うぐひすの響く道

武蔵野の茅の輪ゆつくり潜りけり

やす保

令和七年五月度作品集より

井藤希 私の選んだ十句

袋掛ければ久々の雨となり
 葉桜に一夜の雨の上がりたる
 芸備線行く連翹の風の中
 蝶に道ありしか又もその木越ゆ
 たんぽぽの絮吹きし日と思ひけり
 人混みの途切れ一人の薄暑光
 明星の朧のままに空へ消ゆ
 門柱に蟻の行き交ふ立ち話
 木の芽和酒好きの友現はるる
 夏めくや伸ばせる髪を結へばなほ

佐保光俊
 高尾ひとみ
 綾乃
 暁子
 辻純江
 松田裕子
 村上正人
 秋楡
 山野ウタ
 上島康子

すみれ 私の選んだ十句

蝶々の近く来てゐる心礎かな
 葉桜に一夜の雨の上がりたる
 落味噌のおすび頬張る昼餉かな
 青蔦の家の明りを今日も見る
 行くほどに鳥声高し若葉山
 万緑や峠を越えて町へ出る
 帰省子を待ちつつ朝の庭を掃く
 検診に山藤揺るる峠越え
 収まらぬ助詞の一文字楠若葉
 藤棚や隣の席の出雲弁

佐保光俊
 高尾ひとみ
 あざみ
 亜矢
 暁子
 ちどり
 雲雀
 村上正人
 森口良樹
 高梨英子